

＜モノ＞と＜コト＞の構文現象と英語教育 — 日英対照と母語話者の事態の捉え方の視点から —

對馬 康博

1. はじめに

第二言語習得としての英語の学習には日本語という母語干渉を避けることはできない。もっぱら英語と日本語の言語表現に乖離がある場合には、学習者に対し適切にその差異を導入することなくその英語表現の運用の向上は望めない。すなわち、教授する側が日英語を対照し学習者に両言語の統語、意味、言語運用といった言語の「システム」の仕様・限界を提示し、指導していくことが必要不可欠なわけである。Bolinger (1977: x)は英語という言語内で「形も違えば意味も違う。意味も違えば形も違う。 (“One form for one meaning, and one meaning for one form.”)」という立場から構文を分析しているが、これに換れば、「言語が違えば表現も違う。表現が違えば言語も違う。」と言うことができよう。そこで本稿では、英語表現と日本語表現の差、特に一見すると意味が対応すると思われる表現同士が、実は根本的に異なる意味を反映しているという可能性があることに着眼する。

さらに、言語教育を考える上では、言語使用者が出来事をどのように捉え (construe)、言語化しているのか、換言すれば、自分に見える世界をどのように切り取り、それを言語表現に反映させているのかという視点を導入していくことも重要である。日英語話者は生物学的かつ生得的に同じ認知体系を持って生まれていても、言語が獲得されるのと並行して認知処理の仕方、つまり、捉え方 (construal) が異なっているとすれば、当然産出される言語表現も異なっている可能性があるわけである。¹

そこで小稿では、こうした言語観に基づき、日本語の＜モノ＞と＜コト＞に関する言語表現が英語においてどのような構文内で反映され、それをどのように指導すべきなのかという教授法に対して指針を打ち出すことを主たる目

的とする。その前提として、<モノ>と<コト>という概念そのものの捉え方の違いを浮き彫りにすることが鍵となる。この<モノ>と<コト>にという概念は日本語母語話者であれば、難なく使い分けられるだろうが、英語教育上は第二言語習得者としての日本語母語話者の視点から、どのような英語表現が日本語の<モノ>や<コト>に該当し、どのように使い分けられるのかという点を整理し、さらに、学習者への教授法を考える必要性が要求されている。

以上のことを踏まえて、本稿の構成は以下の通りである。第1節(本節)は導入であり、第2節では日本語の<モノ>と<コト>概念そのものと英語における概念について考察する。第3節では、日本語の<モノ>と<コト>概念が英語の構文の中でどのように反映しているのかという点に着目し、日英語の<モノ>と<コト>概念の捉え方の違いについて考察する。第4節は、第3節での議論を受けて、英語の<モノ>構文を英語教育の中でどのように展開するべきかという課題に対して指針を打ち出す。第5節は結語である。

また、小稿では<モノ>や<コト>という概念そのものを理論言語学的や哲学的に探求するものではなく、日本語の<モノ>や<コト>やそれに対応する英語の *thing* の現象を素描し、言語事実にありのままの姿(*as they are*)を語らせ、さらにその点描から英語教育を見つめ直すことを目指していることを予めお断りしておく。

2. 日英語の<モノ>と<コト>という概念の棲み分けと機能

本節では<モノ>と<コト>という概念が日本語と英語でどのように棲み分け(niche)をなしているのかという点について考察していく。

2.1 日本語の<モノ>と<コト>と英語の *thing* の点描

まず、次の例を見よう。

(1) a. そんなことをするものではありません。

b. *???そんなものをすることではありません。

(容認度判断印は對馬による)(葛西 1997: 118)

- (2) a. そんなことを言うものではありません。
b. */?/?そんなものを言うことではありません。
- (3) a. そんなものを食べたことがありません。
b. */?/?そんなことを食べたものがありません。
- (4) a. そんなことを聞いたことがありません。
b. */?/?そんなものを聞いたものがありません。

日本語母語話者であれば、(1)-(4)の例を適切に理解し運用することが可能であろう。では、これらの違いは何であろうか？直にかつ簡素に言えることとしては、<モノ>と<コト>は同一の概念ではなく、異なる概念であるからこそ各例の(b)の容認性が低いということであろう。もっと言えば、日本語母語話者は<モノ>と<コト>の意味には相違があることを前提としてこれらの概念を言語上でも区別していると言えるわけである。

しかし、<モノ>と<コト>という概念を英語で考えてみると事態は一変する。典型的には英語で<モノ>と言えば“object”であり、<コト>と言えば“event”などが相当するだろうが、試しに手元にある学習者向けの英英辞典を引いてみると、“thing”という一語でこれらの概念を示せることが分かる。

- (5) You can use **thing** to refer to any object, feature, or event when you cannot, need not, or do not want to refer to it more precisely. (COBUILD)

つまり、英語の **thing** は<モノ>と<コト>の意味も包摂する高次の概念の語彙であるわけである。これを確かめるために次の例を見よう。

- (6) a. She's very fond of sweet things. (OALD)
- b. All their things were destroyed in the fire. (CALD)

- (7) a. People say things they don't mean when they are angry. (LDOCE)
- b. There wasn't a thing we could do to help. (OALD)
- c. There's another thing I'd like to ask you. (OALD)

(6a)の thing は「甘い<モノ>」であり、(6b)では「彼らの所有物すべて」、つまり、<モノ>を表している。一方、(7a)の thing は「彼らが意図していない<コト>」であり、(7b)では「助けることができる<コト>」であり、(7c)では「あなたにお願いしたい<コト>」である。これらの例が示すように、英語では thing という一語で表わす意味内容が、日本語では分化した<モノ>と<コト>という別の語彙を用いて表しているわけであり、現にこれらの例において日本語で<モノ>と<コト>という語をそれぞれ置換すると不自然になると思われる。こうした例が示していることは、葛西(1997: 118)の「日本語の「こと」「もの」にあたるものが英語では共に thing で示されている。」という指摘や池上(1981: 256)の「日本語の「モノ」と「コト」に相当する表現は必ずしも他の言語に同じような形で認められるとは限らない。例えば、英語ではどちらも thing という同一の語で表されてしまう。」という考えと符号するものである。

さらに次の例をみたい。

- (8) a. A priest has to arrange funerals, marriages, that sort of thing. (LDOCE)
- b. Things are going well now.
- c. Try to see things from my point of view. 「私の立場で物事を考えてみよ。」
(ロングマン英和辞典)

(8a)の例が示しているのは「そういった類いのもの(ごと)」であり、他方、(8b)では「ものごとが万事上手くいっている」わけであり、同様に(8c)でも「もの

ごとを考える」わけである。すなわち、thingは<モノ>と<コト>のどちらも彷彿させる概念を表しているわけである。

続けて次の例を考察してみよう。

(9) a. “What’s that thing in the middle of the fountain?” “Some kind of statue, I guess.”

「噴水の真ん中にあるのは何だろう？」 「何かの像だろうな」

(COBUILD, E/J)

b. The funny thing is, I really enjoyed myself even though it rained all day.

「おかしいのはね、一日じゅう雨が降っていたのにとっても楽しかったということなんだ。」

(ロングマン英和辞典)

これらの例がおもしろいのは英語の thing に対応するものが日本語では助詞の「の」と訳されている点である。(9a)の「の」の機能は明らかに<モノ>に対応するであろうし、他方、(9b)では<コト>に対応するであろう。こうした対応関係における詳しい言語学的分析は他の論考に譲ることにするが、英語の thing という語が多様な機能を果たしていることが窺える。

2.2 <モノ>と<コト>の概念の意味・機能

こうした言語記述から明らかなように、日本語では<モノ>や<コト>を明確に区別して使用するのに、英語ではこれらの概念を thing という一語で担わせることができることが分かった。では、英語では thing で済ますことができるところを日本語ではなぜ<モノ>と<コト>という概念を言語表現として分化させる機能が働いているのだろうか？そこで、まず日本語の<モノ>と<コト>の性質を明らかにすることから迫りたい。

大野晋(1979)は<モノ>と<コト>を次のように定義している。

<モノ>と<コト>の構文現象と英語教育一日英対照と母語話者の事態の捉え方の視点から—(對馬)

- (10) コトが、時間的に推移し、進行して行く出来事や行為を指すのに対して、モノの指す対象は、時間的経過に伴う変化がない。存在としてそのまま普遍である。

(大野 1974: 29)

つまり、<コト>というのは時間的推移を含むのに対して、<モノ>というのはそのような推移を含まず、「時間的安定性」(cf. Givón 1979)を有したものであるということになる。^{2 3}

このように時間的安定性の観点から考えてみると、<モノ>と<コト>の概念の本質が見えてくる。次のミニマルペアで考えてみよう。

(11) a. 本を読むことは良い。

b. *本を読むものは良い。

(12) a. *本ということは良い。

b. 本というものは良い。

(11)及び(12)はそれぞれ<モノ>と<コト>を反映する言語表現であるが、その容認性は次のことから説明できる。

(11) a'. [本を読む]こと

b'. [本を読む]もの

(12) a'. [本という]こと

b. [本という]もの

つまり、(11)の容認性は括弧内の[本を読む]ということが時間的推移を含んだ出来事であるから<コト>と結びつくが、その逆に<モノ>とは結び付かないことになる。同様に(12)では括弧内の[本(という)]が時間的に安定した物体として認識されているので<コト>よりも<モノ>と結びつくことになる。先にみた

(1)-(4)の例についても同様の分析により容認性の説明が可能である。

甚だ簡素な考察ではあるが、典型的な<モノ>や<コト>に関する定義は以下のようにまとめることができる。⁴

(13) 典型的な<モノ>と<コト>の定義:

<モノ>: 時間的に安定した存在

<コト>: 時間的に不安定で、ゆえに時間の推移を含む出来事もしくは
(恒常的な)属性

ただし、これは全ての<モノ>や<コト>に当てはまる抽象的な定義というよりも、典型的な<モノ>や<コト>に当てはまる定義と言えよう。⁵

次に、このように捉えられる<モノ>や<コト>の概念と英語との関係について述べたい。先程来より議論しているように日本語では<モノ>や<コト>を明瞭に区別して運用するのに対して、英語ではこれらを *thing* という一語で意味機能を担っているわけである。では、英語母語話者は<モノ>や<コト>という概念自体を意識していないのだろうか？既に葛西(1997)が引用し指摘しているように、Quirk et al. (1985)のような20世紀を代表する英文法の大著では次のような例を挙げて説明している。

- (14) a. I noticed *a man hidden* behind the bushes.
b. I noticed *a man who was hidden* behind the bushes.
c. I noticed *that a man was hidden* behind the bushes.

(Quirk et al. 1985: 1269)

- (15) a. He was warned by *the fact that a light flashed repeatedly*.
b. He was warned by *a light that flashed repeatedly*.

(ibid.)

Quirk et al.はこうした例の差について、英語母語話者はこれらの意味の差をほとんど見出さないか、全く見出さない(“[...] native English speakers [...] see little or no difference in meaning” (ibid.))とのことである。葛西(1997)は(14b)は「隠れていた人に気がついた」(ibid.: 120)と述べ、他方、(14c)は「人が隠れていたことに気がついた」(ibid.)と述べている。さらに、葛西(ibid.)は(15a)について「明かりが繰り返した光ったという事実=こと」(ibid.: 121)について述べたものであり、(15b)は「繰り返した光った明かり=もの」(ibid.)を描写していると指摘している。やはり英語では<モノ>や<コト>という概念を明確に区別して運用していないことが窺え、だからこそ、thing 一語でその意味機能を担わせることも可能なわけである。

2.3 <モノ>と<コト>の概念のまとめと言語類型

以上の 2.1 節及び 2.2 節の議論をまとめると次のようになる。日本語では<モノ>と<コト>という概念自体を明瞭に区別して、言語表現としても分化して運用する。その際に<モノ>は時間的に安定した存在を指示対象とし、<コト>は時間的に不安定で、ゆえに時間の推移を含む出来事もしくは(恒常的な)属性を指示対象とする。一方、英語では thing 一語で表されるように、<モノ>と<コト>という概念自体を明確に区別せず運用していると言える。

では、このような事実を受けて、英語と日本語では言語類型的に何が違っているのだろうか？影山(1996)によれば、英語は「結果重視」であり、日本語は「動き重視」であるという。結果を重視する英語は完結性を意識し、ゆえに個体を重視する言語ということになろうし、動き、つまり、過程を重視する日本語は非完結性がゆえに連続体を重んじる言語ということになろう(cf. 池上 1981, 2006)。

こうした言語類型を受け、再び<モノ>と<コト>という概念に戻ると、ある面白い傾向性が見えてくる。次の引用を見よう。

(16) <もの>は<個体>中心的な見方から生み出されるものであるし、<こ

と>は<全体的状況>中心的な見方から生み出されるものである。[...] 日本語では<こと>的な捉え方が優位に立っているようであるし、反対に英語では<もの>的な捉え方の指向性が明らかに強い。[...] 英語はむしろ<もの>を<こと>から取り出して露呈する。

(池上 1981: 257-258)

- (17) 英語では「こと」を表現する時の「ーがーする(こと)」の中から「ーが」の部分抜き出して「もの」のように表現してしまう、ということである。

(葛西 1997: 120)

- (18) 確かに英語は、ある情況ないし出来事を言語化する時、まずこれを論理的に分析し、文節化して、一個のアイデンティティーをもつと考えられる項を析出し、ある実体的<もの>として名詞化する[...]。さて、こうして名詞として定着した<もの>が、もう一つの、同じように抽出された<もの>にたいして、なんらかの動作を働きかけ、その結果として一つの情況なり出来事が成立した—英語は、こういう捉え方をする傾向が強いのである。これにたいして日本語は、情況ないし出来事を、できるだけこれに密着して、まるごとすくい取ろうとする。抽象的に文節化して、実体的なく<もの>が、もう一つの<もの>に働きかける関係として捉えるよりは、あたかも情況が、全体としておのずから成ったというように一つまり、要するに<こと>として捉えようとする傾向が強い。

(安西 2000: 64-65)

つまり、日本語母語話者は<モノ>が埋没した全体状況的捉え方を好むがゆえに<コト>中心の言語表現を好み、他方、英語母語話者はむしろ<コト>の中から個体を露呈した捉え方を好むがために<モノ>中心の表現を好むという、同一事態でも各言語の母語話者の事態の捉え方の違いが言語表現に反映するという言語観が成り立つわけである。

先に議論したように、英語では<モノ>と<コト>という概念自体を明確に区別せず **thing** 一語で表させるわけであるが、事態の捉え方からすると、個体としての<モノ>から<モノ>への働きかけという論理関係を好む個体中心かつ結果中心指向であるがゆえに、英語母語話者は<コト>の中から個体を露呈した捉え方をし、<モノ>中心の表現を好むと考えられるわけである。

以上の議論から、日英語の<モノ>と<コト>に関して次のようにまとめることができる。

- (19) **日英語の<モノ>と<コト>の優位性:** 英語は個性が優位がゆえに<コト>の中から<モノ>を抜き出すことを好み、他方、日本語は連続体としての全体的状況が優位がゆえに<モノ>が<コト>の中に融解してしまい、<コト>全体として捉える傾向性がある。

こうした言語毎の好まれる言い回しを受けて、英語教育を考える上では、外国語としての英語の習得の際の母語干渉を考慮する必要性がある。つまり、<コト>が優位な日本語を母語とする学習者にとって<コト>の中から<モノ>を抜き出した英語表現には抵抗感があるはずである。次の第3節では<コト>の中から<モノ>を抜き出した英語の構文をとそれに対応する日本語表現をいくつか取り上げて現象を観察し、第4節でそうした現象の教授法を考える材料としたい。

3. <コト>の中から<モノ>を取り出した英語の構文現象と対応する日本語表現

前節で確認した各言語の優位性が正しいとすれば、英語では<コト>の中から<モノ>を取り出した構文現象が多いはずである。本節では、そのような構文現象の典型的なものをいくつか取り上げ点描し、対応する日本語表現との関係を述べる。取り上げる構文は「関係詞代名詞構文」(3.1 節)、「形容詞用法の不定詞構文」(3.2 節)、「中間構文」(3.3 節)、「**tough** 構文」(3.4 節)、「無生

物主語構文」(3.5節)である。

3.1 関係詞代名詞構文

まずは「関係詞代名詞構文」から取り上げてみよう。関係詞構文は2つの節を合成して産出するわけであるが、特に関係代名詞構文は関係代名詞節(従属節)において母型文(主節)の先行詞と同一の指示対象を削除することで産出され(cf. 中島 1980)、従属節には文素などの要素が欠けるという空所が出来ることになる。言い換えれば、この構文は従属節という<コト>の中から<モノ>を抜き出した構文ということになる。次の典型的な関係代名詞構文で確認しよう。

- (20) a. I have an uncle who lives in Tokyo. (私には東京に住んでいる叔父が(一人)います。)
- b. The woman is a pianist who(m) I met yesterday. (あの女性は昨日会ったピアニストだ。)
- c. He is the boy whom I talked with yesterday. (彼が昨日話した少年だ。)
- d. This is the book about which I was talking yesterday. (これが私が昨日話していた本です。)

(20a)は従属節という<コト>の中から主語である he (=the uncle)という<モノ>が抜き出されたものであり、(20b)は従属節の中から目的語である her (=the pianist)という<モノ>を取り出したものである。同様に、(20c)は従属節の中から前置詞の目的語である him (=the boy)という<モノ>を抜き出したものであり、(20d)では前置詞を前置しているが、従属節の中から前置詞の目的語である it (=the book)を取り出したものである。さらに対応する日本語表現においても、(20a)では叔父が東京に住んでいるという<コト>の中から叔父という<モノ>を取り出した格好の表現となっているし、(20b)でも私が昨日ピアニストに会ったという<コト>の中からピアニストという<モノ>を取り出したように

見受けられる。同様に(20c)では私が昨日少年と話したという<コト>の中から少年という<モノ>を抜き出しているし、(20d)では、私とその本について昨日話していたという<コト>の中から本という<モノ>を露呈する様相を示している。

このように、日英対照の観点からすると、こうした典型的な英語の関係代名詞構文と対応する日本語表現は一見すると自然な対応関係にあるように思われる。しかし、池上(1981)は次の(21)のような言語現象を挙げ、その対応関係に関して面白い指摘をしている。

- (21) a. Do you know of the millions in Asia that are from protein deficiency because they get nothing but vegetables to eat?
- b. 手ニ入レル食物ト言エバ野菜バカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルアジアノ何千万人ノ人タチヲ知ッテイマスカ
- c. アジアの何千万人トイウ人タチガ手ニ入イル食物ト言エバ野菜ノバカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルコトヲ知ッテイマスカ

(池上 1981: 258-259)

池上(1981: 259)によれば、(21a)の英語表現を直訳し従属節の<コト>の中から「アジアの何千万人」を取り出した<モノ>的な表現が(21b)であり、他方、(21c)は出来事そのままを表現した<コト>的な表現であり、<コト>の優位性を有する日本語では(21c)の方が自然な日本語表現であると言う。また、日本語では関係代名詞構文がそれほど発達しなかった理由として、関係代名詞構文は<モノ>的な構文であるため、<コト>の優位性を有する日本語とは相容れないと指摘している。やはり、英語では<コト>の中から<モノ>を取り出した関係代名詞構文を用いる事態でも、日本語では<コト>を中心とする言い回しの方が自然なわけである。

さらに what を用いた関係代名詞構文を見よう。

- (22) a. This is what we wanted to know. (これが私たちが知りたかったことです。)
 b. Show me what you bought yesterday. (昨日買ったものを見せなさい。)

what は先行詞を包摂したものであり、which や who の関係代名詞構文と同様に、従属節には文素などが欠けるという空所が出来る構文である。興味深いのは英語の thing と同じように what は<モノ>とでも<コト>とでも解することができるという点である。(22a)では know の目的語としての知る対象が<コト>と解されているわけであり、(22b)では buy の目的語としての買った対象が<モノ>と解されている現象である。このように考えると、what 自体で<モノ>や<コト>という機能分化が起きており、それが what 構文全体の文脈の中で特定されているように思われる。⁶

以上のように、英語の関係代名詞構文の多くは<コト>の中から<モノ>を取り出すという日本語の<コト>の優位性とは異なる性質を示す構文だと言えるわけである。

3.2 形容詞用法の不定詞構文

次にいわゆる「形容詞用法の不定詞構文」を考察したい。次の例を見よう。

- (23) a. The man to help you is John. (あなたを助けてくれる人はジョンだよ。)
 b. I have some letters to write. (私には書かなければいけない手紙が数通ある。)
 c. I need some scissors to cut the paper with. (紙を切るためのはさみが必要だ。)
 d. He has a right to decide it. (彼にはそれを決める権利がある。)

形容詞用法の不定詞構文は大別して4つに分けることができる。ひとつは(23a)の被修飾名詞句の the man が不定詞の意味上の主語のように見えるものである。二つ目は(23b)の被修飾名詞句の some letters が不定詞句内の動詞 write の意味上の目的語となるものである。三つ目は(23c)の被修飾名詞句 the paper が不定詞句内の前置詞 with の意味上の目的語となるものである。四つ目は(23d)の被修飾名

<モノ>と<コト>の構文現象と英語教育一日英対照と母語話者の事態の捉え方の視点から一(對馬)

詞 **a right** が不定詞句と同義になる意味上の同格型のものである。これらのうち、(23a-c)のタイプが<コト>の中から<モノ>を抜き出した構文である。具体的にはそれぞれ不定詞句の出来事という<コト>の中から母型文の中で被修飾名詞句となる<モノ>を取り出しているわけである。

対応する日本語表現との関係で考えると、<モノ>を取り出した各々の例の括弧内の例よりも<コト>的な表現(それぞれ、「あなたを助けてくれるのはジョンだよ。」「手紙を数通書かなければならない。」「紙を切るためにはさみが必要だ。」)の方が自然で好まれる言い回しであると判断されるかもしれない。

3.3 中間構文

次にいわゆる「中間構文(Middle Construction)」を検討する。⁷ 次の典型的な中間構文の例を見よう。

- (24) a. This book sells well. (この本は良く売れる。)
- b. This car drives easily. (この車は運転しやすい。)
- c. This paper reads like a novel. (この論文は小説のように読める。)

中間構文には制約が多く、例えば、この構文に用いられる動詞は中間動詞(middle verb)と言い、どのような他動詞でもこの構文が生産されるわけではない(cf. *This book buys well.)。また、現在時制の事例がほとんどであり、主語名詞句位置に生起する<モノ>の「属性(property)」を述部以下で描写する構文である。言い換えれば、主語名詞句の特徴付けをしている構文である。

また、大きな特徴として、中間構文では中間動詞という他動詞が用いられているにも関わらず、その目的語が本来の動詞後ろの位置(post-verbal position)にはなく、見かけ上、主語位置にあるように思われる。⁸ したがって、動詞後ろの位置には空所が生じ、述部で表される事態としての<コト>の中から目的語である<モノ>を主語位置に取り出したように思われる構文である。しかし、この構文の主語は典型的な文の主語である動作主のような働きはしておらず、

単に特徴付けの対象、つまり、「**題目(topic)**」のような機能を果たしているように思われる。

中間構文に対応する日本語表現では動作主を表す「**ガ格**」ではなく、題目を表す「**ハ**」で表されており、題目の名詞句の特徴付けを描写する構文として、**<コト>**中心の表現となっている。⁹

3.4 tough 構文

続いていわゆる「**tough 構文**」について検討する。次の典型的な **tough 構文**の現象を見よう。

- (25) a. This problem is impossible to solve. (この問題は解決するのが不可能だ。)
 b. John is pleasant to talk to. (ジョンは話しかけられて嬉しい。)
 c. This book is useful to read. (この本は読むと役に立つ。)

この構文は難・易を表す形容詞(easy, difficult, tough, hard, impossible など)、感情を表す形容詞(pleasant, fascinating, thrilling など)、評価を表す形容詞(nice, good, bad, useful など)などを伴う事例に限定されているという制約があり、中間構文同様に、主語名詞句位置に生起する**<モノ>**の「**属性**」を描写する構文である。

また、**tough 構文**は他動詞が用いられているにも関わらず、その目的語が本来の動詞後ろの位置にはなく、見かけ上、主語位置にあるように思われる。よって、動詞後ろの位置には空所が生じ、不定詞句で表される事態としての**<コト>**の中から目的語である**<モノ>**を母型文の主語位置に取り出したように思われる構文である。したがって、学校文法では良く(26)の**<コト>**を中心とする形式主語構文とパラフレーズ可能であるとされている。

- (26) a. It is impossible to solve this problem
 b. It is pleasant to talk to John.
 c. It is useful to read this book.

<モノ>と<コト>の構文現象と英語教育一日英対照と母語話者の事態の捉え方の視点から—(對馬)

さらに、中間構文と同様に、この構文の主語は動作主のような機能はしておらず、単に特徴付けの対象、すなわち、「題目(topic)」のような機能を果たしているように思われる。

これまた中間構文と同様、**tough** 構文に対応する日本語表現では動作主を表す「ガ格」ではなく、題目を表す「ハ」で表されており、題目の名詞句の特徴付けを描写する構文として、<コト>中心の表現となっている。

3.5 無生物主語構文

最後に「無生物主語構文」について触れておきたい。無生物主語構文に関する研究は様々あるが、そもそも無生物主語構文という名称自体は日英対照的視点に立って始めて出来る構文名である(cf. 對馬 2011, 2013a, 2013b)。現に学校文法で定評のある江川(1991)の『英文法解説』においても第1章 III 節において、「日本語と異なる名詞の用法」というセクションが設けられ、その中のひとつとして無生物主語構文を記述している。¹⁰

次の無生物主語構文の事例を見よう。

- (27) a. **This medicine** will make you feel better.
(=*If you take this medicine, you will feel better.*)
- b. **A few minutes' walk** brought us to the park.
(=*After a few minutes' walk, we came to the park.*)
- c. **The bad weather** prevented us from leaving.
(=*We could not leave because of the bad weather.*)
- d. **This song** reminds me of my childhood.
(=*When I hear this song, I am reminded of my childhood.*)

(江川 1991: 25-26)

これに対応する日本語表現として、江川(1991)は無生物主語を副詞的に解釈した(28)のものを挙げているが、これを(29)のようにガ格主語やハの題目で表すと

容認性が下がってしまう。

- (28) a. この薬を飲めば、あなたは気分がよくなるでしょう。
b. 数分歩くと、私たちは公園に出ました。
c. 悪天候のために、われわれは出発できなかった。
d. この歌を聞くと、私は子供のころを思い出します。

(ibid.)

- (29) a. ??この薬はあなたに気分を良くするでしょう。
b. ??数分の歩きが私たちを公園へ連れていった。
c. ??悪天候がわれわれを出発することから避けた。
d. ??この歌が私に子供のころを思い出させます。

(著者訳 (cf. 對馬 2011, to appear))

さらに、池上(2006)では無生物主語構文の無生物主語には<コト>として解釈されるものと<モノ>として解釈されるものの2種類が存在することが指摘されている。

(30) [必ず効くと思われる薬をもってきて]

- a. “This medicine will make you feel better.”
b. 「この薬で気分がよくなるでしょう。」

(31) [間違いなく問題のドアを開けられる鍵を持ってきて]

- a. “This key will open the door.”
b. 「この鍵でドアが開くでしょう/ドアを開けられるでしょう。」

(池上 2006: 163)

具体的には (30a)では medicine という<モノ>が主語であるが、medicine とい

う語で意図されている意味はこの薬を飲むという<コト>として解釈も可能であるし、また、(31a)では“key”が<コト>より<モノ>であるという解釈がしやすい旨を指摘している。¹¹

池上の指摘に基づき、著者の考えを述べさせていただきたい。(30a)では<コト>として解釈されるということであるが、*this medicine* を<コト>として解釈できるとはどういうことであろうか？これに答えるためには、(27)のように無生物主語構文と括弧内の無生物主語を副詞的狀況で表した表現が対応関係にありパラフレーズ可能だと想定することが必要であると思われる。つまり、(30a)の無生物主語を副詞的表現としての狀況と解すれば、「(あなたが)この薬を飲めば(*if you take this medicine*)」という<コト>の中から「この薬(*this medicine*)」を抜き出したものになる。同様に(30b)も無生物主語を副詞的に解釈すれば、「(あなたが)この鍵を使えば(*if you use this key*)」という<コト>の中から「この鍵(*this key*)」を取り出したものになる。すなわち、無生物主語構文は<コト>の中から<モノ>を抜き出し主語に据える構文となるわけである。¹²

しかし、このような分析はあくまでも、日英対照的視点から分析した際に始めて可能となる分析である。むしろ、実際には(27)のような英語の無生物主語構文の無生物主語名詞句は<モノ>や<コト>をあまり明瞭には区別せずに主語位置に生起しているわけであり、(18)の安西(2000)の引用が物語っているように、無生物主語構文全体として、実体と実体の関係を論理的かつ分析的に述べているということである。それに対して(28)のような英語の無生物主語構文に対応する自然な日本語表現は、全体狀況としての<コト>指向が優位であるがゆえに、<モノ>を狀況の中に埋没させ<コト>としてそのまま語る言語形式を好むということであろう。

3.6 現象のまとめ

以上の言語現象から言える傾向性として、英語では<コト>の中から<モノ>を取り出した構文現象が多いということである。では、なぜ英語では<コト>

>の中から<モノ>を取り出した構文として上記のような構文を用いるのだろうか？これにはいくつかの機能的意義があるように思われる。例えば、関係代名詞構文や不定詞の形容詞用法構文は名詞句を修飾し、2つの節や句を合成するという機能がある。また、中間構文や tough 構文は<モノ>名詞句を<コト>から取り出し主語に据えることで、その名詞句の「属性」を描写する働きをする。さらに、無生物主語構文は副詞句や副詞節で表される状況としての<コト>全体の中から<モノ>だけを取り出して主語に据えることで、「統語の圧縮(structural compression)」(cf. Leech 1974)の効果がある。

さらに、日英対照の観点からすると、英語では<コト>の中から<モノ>を取り出した構文現象の場面で、日本語では<コト>をそのまま表現する方が好まれる言い回しになる傾向性が高いということである。

このような構文を教育する上でどのような指導法が適切なのだろうか？次の節では英語教育の現状を確認上で、この点について考えることにする。

4. <モノ>と<コト>の構文現象についての英語教育の指針

4.1 コミュニケーション重視の英語教育

<モノ>と<コト>の構文現象と英語教育について考える前に、中学校や高等学校の英語教育の現状について触れておきたい。

平成 26 年度現在、現行の学習指導要領では「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」(中学校学習指導要領 第 2 章 各教科 第 9 節 外国語 第 1 款 目標 及び 高等学校学習指導要領 第 2 章 第 8 節 外国語 第 1 款 目標)という共通の文句がうたわれ、コミュニケーション重視の英語教育という目標が窺える。特に高等学校学習指導要領では「英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。」(高等学校学習指導要領 第 2 章 第 8 節 外国語 第 3 款 4)とされ、英語の授業は基本的に英語で行うとされている。

このように、現在の中学校や高等学校の英語教育は「コミュニケーション重視」を打ち出して展開されているわけである。

4.2 <モノ>と<コト>の構文現象と英語教育

第1節で概説したように、同じ状況でも捉え方が違えばその言語表現も異なるはずである。もしこのような言語観が正しく、英語と日本語の母語話者が同一状況を異なる捉え方で捉えているとすれば、当然、両言語の言語表現の背景にある文法体系も根本的には違うことになる。したがって、一見すると意味が対応すると思われる表現同士が、実は根本的に異なる意味を反映している可能性があるというのが本稿の仮説であった。さらに、この仮説が正しいとすれば、こうした日英対照の観点から捉え方による言語観の違いの視点の導入こそがコミュニケーション重視の英語教育において根幹をなす考えであることは言うまでもない。

本稿では第3節において、<モノ>と<コト>の概念の違いを概観した上で、日英語の好まれる言い回し、つまり、日本語は<モノ>が埋没した全体状況的捉え方を好むがゆえに<コト>中心の言語表現を好み、他方、英語はむしろ<コト>から個体を露呈した捉え方を好むがために<コト>中心の表現を好む優位性があることを確認した。そのような両言語の違いを顕著に表す例として、第3節では英語の「関係詞代名詞構文」「形容詞用法の不定詞構文」「中間構文」「tough 構文」「無生物主語構文」の特徴を記述し、対応する日本語表現との差を述べてきた。本節では最後にそのような現象をどのように英語教育の中で教育していくべきかという教授法の点について触れておきたい。

まず、英語構文をパターン化し、旅行・買い物などという典型的な状況を想定し、暗唱させるだけの授業では、生徒がそのような構文を柔軟に運用できるようになる可能性を期待することはできない。本稿の議論からは言わずと知れたことであるが、この構文に関わる英語母語話者と日本語母語話者の事態の捉え方は異なるものであり、ゆえにそれを反映した言語表現も異なっているからである。

したがって、授業ではこのような捉え方の違いを導入しなければならない。具体的には、まず、日英対照的視点を導入する必要がある。特に、同一の状況でも各言語の母語話者において異なる捉え方をしていることを教授することが必要である。さらに、そうした捉え方の違いによって、言語表現においても「好まれる言い回し」が異なることを理解させることが重要である。具体的に本稿で扱った<モノ>と<コト>の現象で言えば、まず、両言語の捉え方の違いを導入し、<モノ>と<コト>の違いについて教授してはどうか。また、英文法の概括が済んだ生徒にはこのような構文現象を個別に指導するのではなく、一括して<コト>から<モノ>を取り出した表現として提示することが良いのではなかろうか。

個別の現象について述べれば、関係代名詞構文や不定詞の形容詞用法構文は、関係代名詞節内や不定詞句内に空所ができ、そこが生徒にとってつまづきやすいポイントであると聞く。また特に前置詞の目的語に空所が生じる構文(cf. (20c)及び(23c))では、生徒に作文させると前置詞が抜けてしまうことが多いことも良く耳にする。こうした構文の教育において重要なことはやはり<コト>の中から<モノ>を抜き出した結果、<コト>の方に空所が生じるということを教え、定着させる必要があるということである。

また、現場では中間構文や **tough** 構文について、このような構文名が出てくことはほとんどないであろうが、日本英語検定協会が主催する「実用英語技能検定」2級の長文では良く見受けられる構文である。この2級のレベルが「高校卒業程度」と評されていることから、やはり高等学校の英語教育ではこのような構文を適切に指導しなければならない。こうした構文も<コト>の中から<モノ>を抜き出し、<モノ>の特徴を述べる構文として指導する必要がある。

さらに、無生物主語構文はいわゆる「受験英語」の定番とされ、多くの学習参考書の類いで扱われている項目であるが、日本語訳、つまり、解釈論を超えて<コト>の中から<モノ>を抜き出し主語に据える構文の一種として指導していき、柔軟に運用できるように指導していくべきであろう。

以上のように、こうした構文の指導には「日英対照」と「母語話者の事態の捉え方」という二つの点が鍵であり、英語の授業を日本語で行うのか英語で行うのかはさておき、これら二つの概念を積極的に導入していくことが昨今の英語教育に必要であることを指針として提起する。

5. 結 語

小稿では、日本語の<モノ>と<コト>に関する言語表現が英語においてどのような構文内で反映され、それをどのように指導すべきなのかという指針を打ち出すことを主たる目的とした。母語干渉を避けられない英語非母語話者としての学習者に対して、日英対照の視点から当該言語の相違点を明確した上で指導することの重要性を説いた。さらに、日本語母語話者と英語母語話者に特有の事態の捉え方を導入する必要性を主張した。本稿の議論からコミュニケーション重視の 21 世紀の英語教育において、このような二つの概念から英語教育を行うことが重要な意味を持つことは言うまでもない。

本稿では、英語の<コト>から<モノ>を抜き出す構文とそれに対応する日本語表現を取り上げ英語教育について考えてきたが、さらに英語には<コト>から<モノ>を抜き出す構文の他に、<コト>を<モノ>化した構文として動名詞構文や派生名詞句構文(学校文法で言ういわゆる「名詞構文」に相当)などという現象がある。こうした現象についての英語教育に関しては今後の課題としたい。

<注>

※小稿は、平成 25 年度札幌大学研究助成(個人研究)における研究課題(研究課題名「日英対照「モノ」と「コト」の言語学: 認知言語学の視点から」(研究代表者: 對馬 康博))の成果の一部である。

¹ こうした考え方は「認知言語学(Cognitive Linguistics)」、特に「認知文法(Cognitive Grammar)」という理論言語学分野において根幹となる精神である。

² 廣松(2008)はこうした分析が不十分であるとして、哲学的視点から「もの」=“名詞類”で表される与件、「こと」=“文章態で表される事態”(廣松 2008: 40)と指摘しているが、

本稿はその真相を問うものではない。

³ 寺村(1981)は(i)の引用の通り、英語の **thing** と日本語の<モノ>や<コト>との関係性を述べ、こうした概念の相違は単に語彙の中にあるのではなく、それが使われている文脈、つまり、<モノ>や<コト>が用いられる構文現象の中で規定されるべきという立場を取っている。この点において寺村の立場と本稿の立場には若干の違いがある。

(i) [...]たとえば英語の **thing** がそれに対応する日本語の文脈の中で、コト、モノ、トコロなどと使い分けられ、しかもある場合には相互の入れ替えが可能であるように、ある場合には他語では決して言い換えられないという事実は、これらのことばの使い分けが、辞書の定義の及ばないところにあることを認めないわけにはいかない。

(寺村 1981: 746)

⁴ ただし、ここでは<コト>を時間的安定性の観点から時間的に不安定な「時間的推移」を含むものとして特徴づけているが、<コト>はさらに時間的推移を直接反映する「事象叙述(event description)」と、時間的推移というよりは恒常的な状態を表す「属性叙述(property description)」に分化することに注意されたい。

⁵ 認知言語学では、あるカテゴリーの全てかもしくは相当数の事例に当てはまる抽象的な構造を「スキーマ(scheme)」と言い、他方、そのカテゴリーの典型的な事例を「プロトタイプ(prototype)」と言う。これに従えば、ここでの定義はプロトタイプの定義と言うことなる。

⁶ what 関係代名詞構文の **what** に先行詞が含有されており、それが良く言われるような **the thing which** のようなものだとする分析が正しいとすれば、**what** が<モノ>とも<コト>解されるのは自然な解釈である。

⁷ 中間構文は「能動受動態(activo-passive)」(Jespersen 1933)などとも呼ばれる。

⁸ 理論言語学ではこのような見方にいくつかの立場があるが、ここではあくまでも記述的学習英文法の立場からの視点であることをお断りしておく。

⁹ 日本語では英語の中間構文に相当する構文を「可能態」と言い、英語よりも許容度が高く、生産性がある。例えば日本語の可能構文で「この茸は食べられる。」という文に対応する中間構文“*This mushroom eats well.”は非文であり、“This mushroom is eatable.”と表現しなければならない。詳しくは對馬(2013b)を参照されたい。

¹⁰ 無生物主語構文の先行研究の総論については對馬(2011)を参照されたい。

¹¹ 對馬(2013a, to appear)では無生物主語が<モノ>や<コト>に解されるものもあるが、中には状況や出来事が出来する<トコロ>としてのセッティング(setting)として分析可能である事例もあることを指摘している。

¹² このような分析の詳細は對馬(2011)を参照のこと。

<参考文献>

- 安西哲雄. 2000. 『英語の発想』 東京: 筑摩書房.
- 江川泰一朗. 1991. 『英文法解説』 改訂三版. 東京: 金子書房.
- Givón, Talmy. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- 廣松 渉. 2008 [1979]. 『もの・こと・ことば』 東京: 筑摩書房.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』 東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』 東京: 日本放送協会出版.
- Jespersen, Otto. 1993. *Essentials of English Grammar*. London: The University of Alabama Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京: くろしお出版.
- 葛西清蔵. 1997. 『英語学演義』 札幌: 共同文化社.
- Leech, Geoffrey. 1974. *Semantics*. New York: Penguin Books.
- 中島文雄. 1980. 『英語の構造 上』 東京: 岩波書店.
- 大野晋. 1974. 『日本語をさかのぼる』 東京: 岩波書店.
- 對馬康博. 2011. 「日英語の無生物主語構文の認知メカニズム—認知文法と認知モードによる解法—」 『文化と言語』 第 74 号. 札幌大学外国語学部. 13-59.
- 對馬康博. 2013a. 「認知文法と認知モードの言語教育への応用可能性 英語の無生物主語構文と対応する日本語表現の分析を中心に」 『第 85 回大会 Proceedings』 日本英文学会. 125-126.
- 對馬康博. 2013b. 「認知叙述類型論の試み: 英語の中間構文・他動詞-able 構文と日本語の能動的可能構文・受動的可能構文の事例」 『日本語用論学会第 15 回大会発表論文集』 第 8 号. 113-120.
- 對馬康博. to appear. 「英語の無生物主語構文と対応する日本語表現の認知文法的再考」(載書名未定)
- 寺村秀夫. 1981. 「「モノ」と「コト」」 馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会(編). 『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 743-763. 東京: 大修館書店.

<辞書>

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 3rd (Cambridge).
- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* 4th (COBUILD).
- Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English, English/Japanese* (COBUILD, E/J).
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th (LDOCE).
- 『ロングマン英和辞典』
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* 8th (OALD).